



Title	『だれも知らなかった「百人一首」』（吉海直人著 筑摩書房）
Author(s)	佐野，比呂己
Citation	国語論集，9：362-363
Issue Date	2012-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7399">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7399</a>
Rights	

【図書紹介】

『だれも知らなかった「百人一首」』

(吉海直人著 筑摩書房(ちくま文庫) 平成二十三年(二〇一一)十月 全二八七頁)

北海道教育大学釧路校准教授

佐野 比呂己

平成二十三年(二〇一一)四月より、新しい小学校学習指導要領が全面实施された。国語科においては「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が創設され、学年を問わず新教科書には教材として古典が採録されている。

小学校教科書は五社から発行がなされており、各社それぞれの編集方針をもとにさまざまな教材が選択されている。その一方で各社ともに採録されている教材もいくつか見られる。古典でいえば百人一首がその一つである。

手もとにある『ひろがる言葉 小学国語四下』(田近洵一ほか編 教育出版 平成二十三年(二〇一一)四月)には「百人一首」を読もう」という教材が配列されている。百人一首とは何かに触れ、代表的な和歌八首を紹介している。音読、そしてかきた遊びを構想し、百人一首と親しむことを通して、「伝統的な

言語文化」を身近なものにとらえさせようというねらいがうかがえる。

百人一首を教材として取り上げるならば、それを指導する教員はそれなりの知識があった方が好ましいことはいまでもない。その際に座右に置いてほしいものが本書である。

百人一首に関する本は山ほど出ている。しかし、どれを見ても代わりばえがしない。どの本も百首の歌の現代語訳と語釈が中心となっていて、それに成立や出典、豆知識や競技かるたの遊びなどがほんの少し付いているだけである。無難にこれまで書かれた本を整理、引用して縮小再生産が繰り返されるばかりである。

本書において吉海直人が目指したのは、研究者の立場から百人一首にまつわるさまざまな関心事項を一般読者向けに易し

くしかも正確に記した信頼できる入門書とすることである。百人一首といえは正月かるたの定番だが、その成立の経緯や歌の選択基準・解釈については、藤原定家がかかわったという事実以外は多くが謎に包まれている。吉海は最新の研究成果を紹介しつつ、できるだけ一般読者向けにわかりやすく解説しようとして試みている。

本書は、左記のように三部構成となっている。

### 第1部 「百人一首」とは何か

・百人一首はいつどのように成立したか  
・『百人一首』の出現  
・「小倉色紙」の真贋  
・撰者・藤原定家の



### 第2部 百人一首のひろがり

生涯 ・「小倉」百人一首という書名 ・定家の息子、為家の役割 ・百人一首に盛られた主題とは ・撰ばれた歌人、撰ばれた歌への疑問 ・定家の意図的誤読  
・百人一首の中の本歌取り  
・連歌師 ・宗祇の存在感 ・歌仙絵の謎 ・歌かるたの誕生 ・百人一首かるたの一人勝ち ・持統天皇は〈看板娘〉 ・〈穴無し小町〉伝説 ・崇徳院の暈の謎  
・式子内親王への愛執 ・百人一首にみる『源氏物語』  
・浮世絵になった百人一首

### 第3部 現代に生きる百人一首

・競技かるた一〇〇周年 ・〈異種百人一首〉について  
・翻訳された百人一首 ・近代文学と百人一首 ・宝塚少女歌劇団の百人一首名 ・百人一首はおいしい  
・猫の戻るまじない歌 ・「小倉山荘」と「時雨亭」  
・百人一首の歌碑建立

本書の特徴として、興味のある箇所から読んでもよいように配慮がなされている点があげられる。また、出典が明らかであり、脚注も詳細にわたり、写真や図版も多く、百人一首を教材として取り上げる際に、貴重な資料となるものが多い。

百人一首の世界の奥深さを実感し、百人一首が身近な存在となる一冊である。